

創作・万葉能「白梅の香」

～大伴家持と永主、娘子児島を想う物語～

三番目物

▷前シテ 若者

▷後シテ 老人（大伴家持の亡霊）

▷ワキ 旅の僧（大伴永主）

父、大伴家持を弔う旅を終え、帰路に向かう大伴永主は父の故郷、奈良に立ち寄った。途中何とも芳しい香りを醸し出す花を咲かせた美しい梅の木に出会う。

思わず立ち止まり、見惚れる永主。

そこへ一人、佇まいの美しい若い男がやってきた。

若い男が言う。

「ここで何をしておられるのでしょうか」

永主が答えた。

「私は、旅の僧でございます。

この梅の木があまりにも美しく立派なので、思わず見惚れていたところでございます。

優しい香り、美しい佇まい、そして懐かしい気持ちを思い起こさせる、

なんと不思議な梅の木でございましょう。

旅の疲れなど一瞬で吹き飛んでしまうようです。」

「それは喜ばしいお言葉。

実は、この梅の木は私が植えたものでございます。」

「それはそれは、この見事な梅の木は、そなたが植えて面倒を」

「ええ。さようでございます。

昔……

この梅によく似た佇まい、香りを醸し出す女性と出逢いました。

聡明で、美しく、されど奥ゆかしい白梅のような女性。
しかし、月日は酷いもの。
その面影も出立ちも、時と共に薄れゆきます。追えば追うほどに薄れゆく。

ところが不思議なものです。ふとした時に感じる香りで、
全てを思い出す瞬間があるのです。
今はもう逢えずとも、せめて、香りだけでも留めておきたい。
その一心で、私は毎日この梅の木に逢いにきております。
あのお方を、少しでも記憶に留め置くために。」

「それは何と美しい話でしょう。
さて、旅の土産にそのお人の話、聞かせてはもらえぬであろうか。」

「ええ、いたしましょう。
この白梅のような、美しく可憐な女性の話を…」

～春の裏^{うち}の楽し^{をへ}き終^たは梅の花手折^をり招^をきつつ遊ぶにあるべし～

～振り仰^さげて若月^{みかづき}みれば一目見^{まよびき}し人の眉引思ほゆるかも～

～若者の語り～

「あのお方に初めて出逢った時、私は十三歳。
見事な梅の花が、競うように咲き誇った季節の事でございます。
私は、父の赴任先である九州の大宰府におりました。
その前年、私は育ての母を亡くしております。
父は、体の弱い母を、赴任先への長旅に付き合わせたことを後悔しては、
嘆き悲しむ日々が続いておりました。
咲き誇る梅の花々を見ても、思い出すのは華やかな都の生活。
心は癒えるどころか、早く都へ帰りたい、賑やかな暮らしのあの頃に戻りたい。
父と二人きりの生活はあまりにも寂しく侘しいもので、
日々を淡々と過ごす事が、当時の私には精一杯でございました。

そのような我が家を心配し、父の友人が集う会を開いてくださいました。
そこに呼ばれたのが、遊女であったその女性です。
名前は、筑紫の娘子といたしましょうか。
美しく聡明な出立ち、されど奥ゆかしい仕草の彼女を、
私は暗闇に静かに光る美しい白梅のような方だと思いました。

宴の最中、娘子が舞を披露しました。
その場をおおらかに優しく包み込む娘子の舞は、
周りのものの心を溶かすような、
あたたかな気持ちにさせてしまう不思議な魅力を持つものでした。
客人の中には、静かに涙を流す方もいらっしゃいました。
私は気づくと、彼女の舞う姿を必死で目で追っておりました。

宴が終わり、
片付けをしようと猪口を手に集めていましたところ
娘子が「お大変でしょう」と猪口を一つ一つ、丁寧に手渡してくださいました。
娘子の袖が振れるたびに、かすかに優しい白梅の香りがいたしました。
その夜を境に、
宴の度に娘子は呼ばれ、宴が終われば私の用事を手伝ってくださいました。
次第に心を許すようになった私は、たくさんのお話をいたしました。
娘子は自分事のように、時に優しい笑みを浮かべ、時に涙を浮かべして
私の話を、ただただ聴いてくださいました。
暗く出口の見えない私の心を、一筋の明かりが照らしてくれました。

私たちの様子を、安心した顔で見守る父はとても嬉しそうでした。

私は、産みの母も幼き頃に亡くしております。
何故、幼き頃の事、顔も姿も覚えてはおりませぬが、
ただふと、記憶の彼方の母の存在を感じる時がございました。
赤子の頃に抱かれた、あたたかな香り。
娘子は、そのあたたかな香りを思い起こさせてくださるお方でした。

亡くなった自分の母はきつとこのようなお方……
母の面影を重ねるつもりが、思えば
それは若い私の初めての恋心だったのかもしれない。
娘子が我が家を訪れてくださる日を、来る日も来る日も待ち望みました。
暗く侘しかった私と父の生活は、娘子の存在によって明るく照らされてゆきました。
どうかこの日々が、永遠に続いて欲しい。
毎日祈るような思いで、彼女を待ち焦がれ、そして見送る日々でございました。

けれども、
別れの知らせは、突然でございました。
父に、大納言として都へ戻る勅命が下されたのです。
父にとっては、これ以上ない名誉なこと。
あんなにも願った華やかな都へ、戻れる日がとうとう来たのです。
ですがその時の私にとっては、もう、どうしてもよきことでございました。

私にもっと齢があれば…
私にもっと強さがあれば…

～引き攀ぢて折らば散るべみ梅の花袖に挽入れつ染まば染むとも～

都へ戻ったあとは、父も私も、娘子に逢うことはございませんでした。
今でも悔いが残ります。

都へ戻った私が、ただただ、あのお方に逢いたい一心で、植えましたのが
この梅の木でございます。

ひとつ思い出がございます。

私の帰京の時、娘子が見送りにきて、歌を詠んでくださいました。

～家思ふと心進むな風守り好くしていませ荒らしその道～

彼女にとっては、息子同然の私を心配し、母心として案じてくださった歌でしょう。

ですが、私にとってはあのお方との唯一の絆。

記憶から面影が薄れ、出立ちが薄れしても、これだけは決して忘れぬものか。

いつか私に子が授かるときは、このうたを教え守ろう。

そう思っておりました。」

若者の話を静かに聴いていた永主は、

事の経緯に戸惑い、驚いた。

「そなた……

何故ゆえにこのうたを知っておられる……

私は幼き頃から、父にこのうたを教わってきたのです。

いついかなる時も、心を流行らせてはいけぬ、落ち着いて冷静に行動せよと。

その娘子の字、もしや児島とは申しませぬか。

そなたは一体何者であるのか。」

永主に問い詰められた若者は、

俯き考え込んだ様子で、黙り込み

白梅の向こうへと消え入ってしまう。

一中入り

自分は長い夢でも見ていたのだろうか…

後ろ髪引かれる思いで、永主がその場を立ち去ろうとしたその時。

「永主よ」

振り返ると、
そこには老いた男性がいた。
永主は自分の目を疑う。
懐かしい父、家持の姿がそこにあったのだ。

出会った若者は、永主の父、今は亡き大伴家持の彷徨える魂の姿であった。

「お父上、お父上だったのですね。
永主でございます。
お懐かしゅうございます。
お父上にもう一度お会いしたい、その一心で旅を続けてまいりました。
まさか、本当にお会いできるとは。」

「永主よ、
わしを思って旅をしてくれたとは、何とありがたきことであろうか。」

家持と永主の親子は、梅の木の下に積年の想いを語り合った。

永主もまた、旅の途中に娘子兎島に出逢ったこと、
兎島は、大伴家での思い出をそれは大切にし
彼らの身を案じて祈り続けてくれていたこと、
娘子の舞いは、この世のものとは思えぬ美しさであったこと、
自分もまた、別れの際に兎島に母の香りを思い出したこと。
全てを語った。
家持はそれを嬉しそうに、安堵した面持ちで聴き続けた。
長い年月をうめる、満ち足りた時間であった。

「兎島。兎島が私とそなたをもう一度出会わせてくれたのだ。」
家持が愛おしむように、白梅を見上げる。

「心の美しい素晴らしい女性でございました。
私は、母のあたたかな香りを、あのお方に感じました。
父上は、兎島さまをずっと想い続けていらしたのですね。」

「そうであったのかもしれぬ。
私は私の求める香りを探し出すため人をも所も彷徨い続けた。
だがその日々は、兎島の姿を追い求め、
そこに母の面影を追い続けた月日だったように今は思える。」

梅の^か花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ

桃の花 ^{くれなゐ} 紅色 ^{おもわ} にほひたる ^{あやぎ} 面輪のうちに ^{まよね} 青柳の ^あ 細き眉根を ^あ 咲みまがり
朝影見つつ ^{をとめ} 少女らが ^{まそ} 手に取り持てる ^{ふたがみ} 真鏡 ^こ 二上山に ^{くれ} 木の暗の
繁き谷辺を呼び響め ^{ゆふづくよ} 朝飛び渡り ^{のへ} 夕月夜 ^{はろはろ} かけそき野辺に ^{ほととぎす} 遙遙に ^あ 鳴く雀公鳥
立ち潜くと ^{はぶり} 羽触に散らす ^{ふぢなみ} 藤波の ^よ 花なつかしみ ^よ 引き攀じて
袖に扱入れつ ^{こき} 染まば染むとも

雪の上に照れる^{つくよ}月夜に梅の花折りて贈らむ^は愛しき^こ児もがも

気がつくと、
ちらちらと雪が降り始めた。

「永主よ、そろそろ別れの時間が来たようだ。
本当に良い時間であった。良い人生であった。有難う。
くれぐれも気をつけて帰りなさい。
家思ふと心進むな風守り好くしていませ荒らしその路」

「お父上、お名残おしゅうございます。
またいずれお会いできるその日まで。
私は大切に生きて参ります。
またお会いするその日まで……」

降り積もる雪のなか、
二人が大きく手を振り合うと、
風が吹き、舞い散る梅の花びらが二人を包み込んだ。
家持は花吹雪の向こうへと消え入った。

永主はあたたかく満ち足りた気持ちのなか、強い足取りで都を後にした。

あらた はじめ はつはる し よごと
～新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや重け吉事～

【歌一覧】

卷19. 4174 追ひて筑紫の大宰の時の春の苑の梅の歌に和へたる一首
春の裏^{うち}の楽しき^{をへ}終は梅の花手折^{たをり}り招き^をつつ遊ぶにあるべし
春の中での楽しい極みは、梅の花を手折り招きつつ遊ぶことにちがいない

卷6.994 大伴宿禰家持の初月の歌一首
振り仰^さけて若月^{みかづき}みれば一目見^{まよびき}し人の眉引思ほゆるかも
空遠くふり仰いで三日月を見ると、一目見た人の引き眉が思われることよ
○年代判明歌の中の家持の初作。16歳頃のものといわれています。

卷8.1644 三野連石守の梅の歌一首
引き攀^よちて折らば散るべみ梅の花袖に挽^{こき}入れつ染^しまば染むとも
引っ張って取り、折ったなら散ってしまうだろうから、梅の花びらを袖にしごき
入れたことだ。（梅の香が）袖に染みるなら染みてもよい。

○作者、三野連石守は家持の父、大伴旅人の従人として大宰府からの帰京の際も、
家持と海路を共にしています。

家持はこの歌風から影響を受けたのでしょうか、

「挽入れつ染まば染むとも」の手法を用いた歌を万葉集で3つ詠んでいます。

児島と別れた時の家持は、少年だった為に歌は詠めませんでした、
彼の心が引き裂かれるような想いと、児島と共にありたい心情に寄りそえるのは、
石守のこの歌だと思いました。

ちなみに万葉集の梅の歌は119首を数え、萩の歌142首に次いで数が多いのですが
その香りを詠ったのは、この石守の歌と

卷20・4500 市原王の<梅の花香を家具はしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ>
の2首のみとなっています。

卷3.381 筑紫の娘子の行人に贈れる歌一首。娘子の字を児島といへり
家思ふと心進むな風守り好くしていませ荒らしその路
家郷が恋しいとて心を逸らせてはいけませぬ。

風のぐあいをよく伺っていらしてください。荒々しいことです。この路は。

○家持が帰京の際、水城まで送りにきた児島が詠った歌。

卷20 4500 (治部大輔市原王)

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ

梅の花は香り高いので、遠いにもかかわらず心もしなえるように、
あなたをお慕いします。

万葉集に珍しい梅の香りを詠った歌 2首のうちのひとつ。

卷19. 4192 (大伴家持)

桃の花 ^{くれなゐいろ} 紅色に にほひたる ^{おもわ} 面輪のうちに ^{あをやぎ} 青柳の ^{まよね} 細き眉根を
咲 ^を 咲みまがり 朝影見つつ ^{をとめ} 少女らが 手に取り持てる ^{まそ} 真鏡 ^{ふたがみ} 二上山に
木 ^こ の暗 ^{くれ} の ^{はるはる} 繁 ^{ほととぎす} き谷 ^{とよ} 辺 ^{とよ} を 呼 ^く び響 ^く め 朝 ^は 飛 ^ぶ り 夕 ^ゆ 月 ^ふ 夜 ^く かけ ^{ふちなみ} そき野 ^の 辺 ^へ に
遙 ^よ 遙 ^よ に 鳴 ^こ く雀 ^{こき} 公 ^{こき} 鳥 ^{こき} 立 ^{こき} ち潜 ^{こき} く ^{こき} と 羽 ^は 触 ^ぶ りに散 ^ち ら ^ち す 藤 ^ふ 波 ^な の 花 ^は な ^な つ ^な か ^な し ^な み
引 ^よ き攀 ^よ じて 袖 ^{こき} に扱 ^{こき} 入 ^{こき} れ ^{こき} つ 染 ^{こき} ま ^{こき} ば染 ^{こき} む ^{こき} と ^{こき} も

桃の花が虹色に輝いているような顔立ちの中に、青柳のような細い眉を笑い崩して
朝の姿を映しつつ 少女が手に取る真鏡の二上山に、木の下を暗くして
木々が繁る谷間を鳴き響かせて、朝を飛びうつ鳥よ。

それがくぐり飛ぶとて羽を振って散らす藤波の花に心ひかれて、

引きよせて袖に扱き入れたことだ。藤の花色に、袖が染みるならしみるのもよい。

「引き攀じて袖に扱入れつ染まば染むとも」三野連石守に影響を受けたであろう
部分です。

卷18.4134 十二月、大伴宿禰家持の作

雪 ^つ の上 ^く に照 ^く れ ^く る月 ^は 夜 ^こ に梅 ^は の花 ^こ 折 ^こ りて贈 ^は ら ^こ む愛 ^は し ^こ き ^こ 児 ^こ も ^こ が ^こ も

雪の上に月が輝いている夜、梅の花を折って贈るような、愛すべき人がほしい
雪月花の美意識のはじまりといわれる歌。

卷20.4516 守大伴宿禰家持作れり

新 ^{あらた} し ^は き ^は 年 ^は の初 ^は め ^は の初 ^は 春 ^は の今日 ^し 降 ^よ る雪 ^し のい ^よ や重 ^よ け吉 ^よ 事 ^よ

新しい年のはじめの、新春の今日を降りしきる雪のように、いっそう重なれ吉き事よ。

元旦の雪は、その年の豊穰のしるしと喜ばれていました。

前作、「水城の別れ」最後の場面で、
大伴永主は児島との別れの際、彼女に自分の母親の香りを感じました。
そこで今作は『香り』を題材に作品を書きたいと思いました。

大宰府から帰京したのちの家持は、笠女郎や粟田女娘子など、
7人以上の女性から恋の歌を贈られるほどに浮名を流したようですが、
家持自身が彼女たちに積極的に歌を詠むことはありませんでした。
そのようななか、家持は万葉の歌人としては珍しく『花の香り』を多く詠っています。
ここに家持の本心が隠されているような気がしました。
あしび、ふぢ、様々な『花の香り』を詠み続けたのは、
花を追い、そこに児島の面影を追いかけ、母の理想を追い続けた為。
大伴家持は、源氏物語の光源氏を思わせます。

けれども家持は、こんなにもたくさんの花の香りを詠ったにも関わらず、
『梅の香り』については、歌を残していません。
児島への想いは、誰にも知られず秘かに心に留めたのでしょうか。

